十二月號
テヅノコ

# 十二月の歴史

昭和八年十二月二十四日　皇太子様の御降誕遊ばされた日です。
明治五年十二月一日　兵役の制度の定められた日です。
平治元年十二月九日　平治の乱のあった日です。
明治二十三年十二月十日　始めて東京に電話が開通した日です。
元禄十五年十二月十四日　赤穂四十七士が主君の仇を打った日です。
昭和六年十二月十一日　金の輸出を禁じた日です。
大正十五年十二月二十五日　大正天皇のお崩御遊ばされた日です。
明治九年十二月二十九日　始めて勲章を臣下に賜はりました。

多事なりし昭和九年も早終らんとす、過去一年を省みて遺憾なき一九三五年の覚悟は如何、非常時は益、非常時ならんとす。立てよ同胞！目覚めよ皆々、足なみ揃へて乗り切れ非常時。

ツツリガタ
ジン

小宮山とし

■カッパ。

私ハヒロ子サンノカッパヲアハテテカブッテカヘリマシタ。ソレデビックリシマシタ。サウシテ、

「ゴハンヲタベテカラモッテイクヨ」。

トイッテ井タラ、カウトウカノ大キイヲランナノ子ガトリニキテ、私ノカッパヲモッテキマシタ。

私ハソノアシタガッカウニイッテ

ヒロ子サンニ、

「ゴメンヨ」

トイヒマシタラヒロ子サンハ、ニコニコワラッテヰマシタ。ソシテ

「ヘイキダヨ」。

トニコニコシテイヒマシタ。

私ハヒロ子サンガオコンナカッタノデウレシクテタマリマセンデシタ。

■ヨッパラヒ　西村喜美子

コナヒダヨッパラヒガケンクワヲシタ。私トミヨネエチャンハアトカデシタノデ、チダラケデオイシャサンノウチノ方ヘイキマシタ。オトウサンガヨッパラヒソシテコンドハ、チダラケデナイ人ニガキーサンノウチノ前ヘネテシマヒマシタ。

モウバンニナリマシタカラ私ノウチヘヨッパラヒガノソノソトイットイマニカハイサコンデ来マシタ。

私トミヨネエチャンガダイドコロヘニゲマシタ。チャウドダイドコロヘアイ子チャンガスワッテヰマシタ。

ヨッパラヒガエンダイカラオリテシヨンベンヲヒッカケマシタ。ソシテカヘリマシタ。

## ヲドリ　和田愛子

キノスガッカウカラカヘッテキテヤッチャントヲドリゴッコヲシマシタ。ヤッチャンニ、「ヲドレ」トイッタラ、「ウン」トイッタカラ、私ガ、「山寺ヲヲドレ」トイヒマシタ。

ヤッチャンガ、山寺ヲヲドリハジメマシタ。私ガヤッチャンニ、

「ウタヲウタハウヨ」

トイヒマシタ。ソコヘトモチャントマサコチャンガ来マシタ。

ヤッチャンガ、

「ヲドルカラウタヲウタヘ」

トイッタカラ、「ホラウタウヨ」トイッテ、ウタヲウタヒハジメマシタ。二バンサキトモチャンガ「山寺ノヲシヤウサンガ」トウタヒハジメマシタ。

ヤッチャンガ、キモノノソデニキヲヘレテヲドリハジメマシタ。

ヤッチャンガ、アンマリジャウズニ
スルノデ、ラシマヒニ、チャウチヲヲタ
タキマシタ。コンドハ
「キントキヲヲドル。」
トイッタカラ、私ハ、「ヲドレ。」ト
イヒマシタ。ヤッチャンガ、ヲドッ
テキタラ、セイコチャンガ来マシタ。
セイチチャンハ、「ハルサメ」ヲヲド
リマシタ。ソノトキ、セイチチャン
ニ、
「ハルサメヲ、ヲドルナラテヌグヒ
ガナケレバヲドレナイカラウチ
ノテヌグヒヲカシテヤルカラヲ
ドレ。」トイヒマシタ。

■キリノミカッセン　渡邊三朝（ワタナベミットモ）

ボクハ、キイチャンタチト、キリノミカ
ッセンヲシマシタ。
コッチモ四ニン、ムカフモ四ニンデス。
イヨイヨ、ハジメマシタ。ボクガナゲタ
ノハシゲチャンニアタリマシタ。シゲチャンハ
「イタイ。」
トイッテ、ケイサツノ方ヘニゲテイキマシ
タ。ボクラハ、オッカケテイキマシタ。
スコシタッテカラ、オヒルニナッタノデ、キリ
ノミカッセンヲヨシテウチヘカヘリマシタ。
ゴハンヲタベテカラマタシマシタ。コンドハ
ボクヲガナゲタノハ、アキチャンニアタリマシタ。

## 尋ニつゞけます方

おばあさんの思出　川崎ヨケイ

今でもおばあさんを思ふとなきま
す。
私がおばあさんを見た時は、おばあ
さんは死んでねましたのであへまねるの
おばあさんはおはかでねて
せんでした。私が四つの時、私をせう
かわいがって下さったおばあちゃんで
した。私は今は毎日がうからか、私のお父さんは、あたまははいから
へると、おばあさんをおがみます。
そして、おせんこうを上げてしやし、ほそ長い人です。それでともき
んを見ますとなみだが出てきますびしい人ですから、私がおともだ
かずをもなきながらせんこうを上へちとけんくわをすると、どなりつ

けます。

いつかもけんくわをして家へにげ、私がおせん立をしますと、「ありがとう。」といって、私のあたまをなぜて下さいます。私はうれしくてたまりこみますと、お父さんがおかってかたうと、といってら上ってきて、「おともだちやきゃうさいます。だいとけんくわをしてはいけないませんでした。私がお母さまとしかりました。私はそれからけ用がありますかとき、いますと、んくわをしないやうにきをつけます。今度はおにはをはいて下さいと、すがついわすれてけんくわをするいひましたから、私はぼうきとごやうになります。み取を持って行って、おにはをきれお母さま　笹本正子

お母さまはいつでも私がおきてみるとこのもきれいにおそうじしねと早くからおしごとをしてなさいました。お母さまはとてもよろこびました。

## 三の（年）（ツ）（リ）（方）

### 防火デー

（其二）

横山秀雄

火の見のかねが鳴った。消防隊の人たちがアチラコチラから、かけ出して、ポンプの置場からポンプを引き出した。學校の庭には、さかんに火がもえ出して來た。町中の人は、男も女も青年も老年も。ポンプや、バケツなど持ってかけあつまって。水は大雨のようにふる。人消防のポンプは屋根をふせぐ。水をはこぶ人。ポンプをおす人の人たちにかかって、頭から一ぱいに水をあびて。ぬれねづみのやうになった。それでも元氣で一せうけんめいに働らいて火をけした。その元氣のよい人達と生徒と一しよになって、消防歌をうたひながら町を

一まわりした。其の時誰か、氣をつけ火の用心と言つた。ヲハリ

友だちのお手紙

諸田光子

おかあさん、群馬縣前橋市の近所で、今年大演習のあつたことがお友だちから知らされてきた。天皇陛下は十一月十日に成られた、學校は十日から二十日迄休みになり、縣ちゆうが大本營で、陛下には毎日ここから演習にお出ましになられた。十五日はちやうちん行列があつてアノ廣い十二間通りも、人で一ぱいになつたとのことである。十六日はお日にかける花火があげられて、陛下か御見物なされたとうです。陛下は十八日おかへりになられたとのことですがそれは々々は前橋も、大へんなにぎやかであつたそうです。そうしたありさまが今目の前にうつて、急に前橋へ行つて見たい氣がします。ヲハリ

（東春尋常小學校　第六學年　女）

## 三年のつゞり方　其二

書き取（十月廿日）

田代美德

一、歯をきれいにする事
　手をきれいにして爪を切つておく事
二、顔は毎朝必ず洗ふ事
　ご飯はしづかによくかんで食べる事
三、間食（あいだぐ）はしない事
　髪の毛は時々手入する事
四、足は夜寢（ね）る前必ず洗ふ事
　夜は早く寢て朝早く起る事

五、餘分のお金を持たぬこと。
ハンケチ、はな紙をもつ事。

書き取(十月三十一日)　大刀岡正江

一、土の中には誰がゐる　春になると芽を出させ
夏になると花さかせ　秋になると實のらせて
冬になると葉を落す　ふしぎ〳〵な土の中

二、土の中には誰かゐる　こんな仕事を誰がする。
神さまゐすかくゐるか　ふしぎ〳〵な土の中
こん仕事を誰がする　み な神さまのする仕事

◎半引いて居てもしわす十二日の心かな◎

## 四年生

# 指

後藤茂義

握る、鉄砲のばねをひく、ひもをむすぶ、などはもし指がなかつたら、我等手はどんなに不自由だらう。大工はくぎをもつこともできず、裁判官やはこてをもつこともできず、ひやくしやうもものもてず、どうすることもできない。人間に指がなかつたらどんなにこまるだらう。指は我等になくてはならないものだ。

淺沼和夫

これはもうずつと前のことです。いもうとの頭をそつて、かみそりをちよつと僕のそばへおきました。
僕は見てゐましたが、どんなにきれるかと思ひながら、二はづゝもつところのはじの方をいじつて見ましたら、きれませんでしたので、あんしんして、だん〳〵とひとゝしゆびをかみそりのまんなかのほうにもつてくると、ぎヨキといつて、ゆびがきれました。その時はあまり血はでませんでした。今はもうひとさし指に、のこつたあとも見えません。

手があつても指がなければなりません。
指はけがをしやすい。ナイフで木をけづる。うつかりすると、指を切る。僕もいつか切つたことがある。その時は、あんまりいたくなかつたが、少したつと、血がでて、ひどくいたんだ。バケツをもつと、はりでさすやうにいたかつた。しかたなしに、くすり指と中指と、人さし指と、おや指の四本の指で持つた。しばらく、血がでゝゐたがだんゝとまつてきた。あの時は、余く不自由だつた。もし、指がなかつたら、どんなにつらいでせう。字をかくこともできず、何をするこもできない。ほんたうに、指は大切だ。

清水完爾

指がなかつたら、私たちはどんなに不自由でせう。字を書くことも出來ないし、ごはんをたべることも出來ません。指には三つふしがあつて自由にうごかすことが出來す。いつでしたか、まだかつこちやんが小さい時、海幸丸のボートで手をはさんだ時私は見てゐられませんでした。血がたくさん出て、ほうたいが血だらけになりました。後でかつこちやんに「いたかつた」と聞くと、「いたくなかつた。」といつた。私はきつとしびれていたくないのだと思つた。かつこちやんを峯にいちやんがつれて行つた。それからかつこちやんは八日ぐらゐ、ほうたいをしてゐた。その間どんなにか不自由だつたらうと思ひます。

石津弘子

『ヲハリ』

## 尋五　綴方

さびしい夜

石津岩子

「おのね今母ちやんはお隣ちやんをよびに行つてくるかりまつてゐなさい。」母は格子戸をがらりとあけると出て行つた。私は後を見送りながらぼんやりと立つてゐた。その時ふと頭にうかんだのは先生からいひつけられた算術の宿題であつた。机を出してしはじめた。隣には妹たちが二人仲よく手をくみスヤ〳〵と何か夢を見てゐるやうによく寝入つてゐる。山の方でがサリ〳〵と音がする。何だらうと思つて耳をすましてきいてゐるとそれは木の葉の散る音であつた。もう十二月だ。寒い時計はカチ〳〵と時をきざんでゆく。さびしい夜だ。寒い夜だ。早く宿題をすませて寝るとしよう。

朝の海

鶴千賀子

白々と夜があける頃私は起きをおんぶして海岸に遊びに行きました。すつかり潮がひいて波にかくれてゐた岩も今日は青いこけを出してゐました。小砂利をがんでは波がさあーッとひいて行きます。海面にたゞよふのは鮒に行つたカヌーであらう。ハツキリと向ふ岸の廣瀬が見えてきた。朝日がパーッと東の空から上つて海も一層明るくなつてきた。空があかく染つて來るころだんだんと波止場の方もにぎはいだした。海から吹く寒い風が波を越えて吹いて來る。

お正月を待つ

神山政子

「早くこい〳〵お正月」と何回も言ひながら家のまはりをかけまわると、弟たちも夜になつて「姉ちやんあといくつねると、お正月」と聞くので「こよみをかぞへてごらん」といふとかぞへてきて「あと二十九ねるとお正月だ」といつても喜んでお父さんのところに行つて「父ちやん二十九ねるとお正月だからお正月にたこと凧つておくれ」といふと「まだ早い」としかられる。私もたまに「初子板はある

から羽子を買つておくれ」といふと、「あまり早まるな、お正月がすぐだらどうする」といふのでお母さんにあやまりました。母はお前が悪かつたのでお正月をまつてしまふ。さうしてあゝこんなにお正月をまつてもお正月は早くはこない。来る日に来るのだと思つてねると、弟は「今ねてしまへばあしたになる、さうすれば二十八日だ又ねると二十九日だといつて喜んで眺しさうにフトンに入つてねたがいつのまにかねてしまつた。

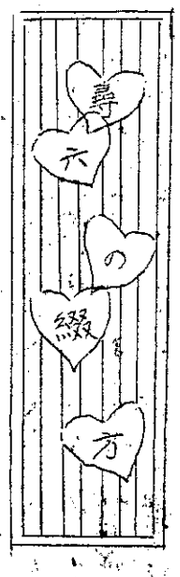
お金　　小宮山ツル

私はお金をなくしてしかられました。それも一銭や五銭でなく五十銭でしたのでひどくしかられました。その時「お前がどうして五十銭のお金がためられるか。出来るならためてごらん」と母に言はれました。父や兄さん達があせみづ流してはたらいたお金をなくしてお前はうれしいかといはれた時に私はあッと考へました。母が言ふのは当り前だと思つた。ほんとうに私には出来ません。ありがつもればやまとなるといふたとへがあるがほんとうだと思ふ。私はお母さんにあやまりました。母はお前が悪かつたのでお母さんにあやまりました。母はお前が悪いと思ふからそんなにしかりません」といつてゆるして下さいました。そしてこれから氣をつける人だよといつたのでは、それからはおつかひに行くときにもお金をしつかりつかんで行きます。

和田昌明

私はおかしな夢を見てねた。のでせう。足をまくらの上に乗せてはんたいにねてゐた。

時計が四時を打つた。私は起上つてかほを洗つて庭に出たあたりに朝靄が一ぱいおりてゐた。何處からか犬のほえる聲がした。戸のあく音もした。又吉さんの家の方へ足を向けた。かこえの中では蜂がぶんぶん音をたて乍らせつせと仕事をしてゐるのでせう。もうどこもかこも戸があいてゐる。私は五時だと思つていそいで家へ帰つたはづだ。さうだ今日は終業の試験があるはづだ。と思つた。




皆さんは東北地方の可哀想な人々に皆さんのお小遣いを上げましたね。東京や横浜の生徒はどんなことをしたでせう。横浜からこの前の船でかへつて来た昭郎君に話してもらひませう

東北地方のきん　菊池昭郎

秋の空はきれいに晴れた。皆思ひ思ひ、ぎえん金の箱を持つて、町を歩きまはつて居る。私もその一人として、電車通りをぐるぐるまはりながら、道を通る人々にぎえん金を願ひますと云つた。すると五銭や十銭又は二十銭入れてくれる。その時のうれしさは何とも云へなかつた。ふと一人のしんしにこえをかけて願ふと、その人は「そんな金は自分がほしいと云つた。その時私の顔はかはつた。何と云ふひどい人なんだらう。私のものではなくて東北地方の人々に送つてやるのに、とおもひかえつて、ぼんやりと並木の側でその人の行先を眺めた。あとから〳〵と金はたまつて行つた。しばらくして先生の所に持つて行つた。六年生全部で百十円九十銭といふ大金が集つた。友達は各々「人々がやさしく金をくれた」と云つて居た。

苦心　　淺沼行雄

僕がいつかえんがはで、くもが巣を作るところを見て居たら、くもがせつかく作つたすを風が吹いて来てこはしてしまつた。そして又作ると又こはれてしまつたが、それでもくもはまだ作つて居るそしてしまひにとう〳〵作り上げた。僕はそれを見て考へた。僕は勉強が出来ないから、くものやうに途中で心をくぢかないで勉強しなければならない。僕は地理と國史が出来ないからうんとこれから勉強しやう。

反省　　沖山政香

私は朝起きて顔を洗つて、學校の仕度をしやうと

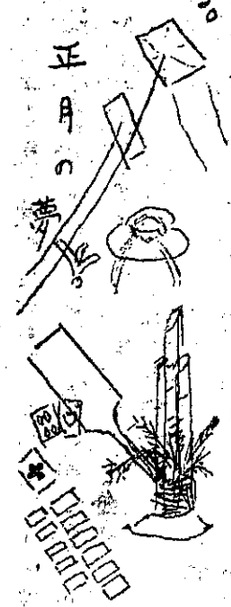
思つて机のとこに行つたら、姉ちやんが手紙を書いて居ました。その時私はよそ見をしてインキをこぼして、そこにおいてあつた着物につけてしまひました。私ははつと思つたけれどしらん顔をして學校に來てしまひました。いよ〳〵じげうがすんで家にかへる時、私の心はどきどきして落ちつきませんダ方になつておふろから出てすはつて居ると、誰がこの着物にインキをつけたとお母さんがいひました。私はなほ胸がどき〳〵してお母さんに早くいつて安心しやうと思つて、私がこぼしましたといつたら、お母さんは正直だといつておこりませんでした。

## 將來の希望のきまらない僕　藤田正行

僕は今母の手元にやしなはれて居る。僕は大きくなつて何になるかまだはつきりと分らない。時々母によばれて「お前は大きくなつて何になると云はれるが僕にははつきりその答が出來ない。僕の父はないし、いつまでも母のやつかいになつてはすまないと思ひながらも僕にはどうしてよいか分らない。しかし父のない人や母のない人も僕ばかりではない。まだ〳〵僕より小さい子ももつとつらいことをして居る。それを思ふと、なんていくぢなしだらうと自分でうらむ。僕はその時にはつらくて時々あつい涙が僕の頬を流れる。だが日本には小さい時に苦勞に苦勞を重ねて立派な人になつた者も大ぜい居る。僕もこれから一生けんめいに働かう。

## お正月　重田實

もう一月たつと正月になる。私は角男君へごちさうしようとして居る。私は正月には十三才になる。私は學校からかへるとみんなの家へ新年おめでたうと行く。今年の正月には二円ぐらひもらつた。來年はいくらもらふだらう、それがたのしみである。




## 高一　卒業後の事を今より考へて見る　藤方イチ

僕は自分に適した職業は農業だと考へてゐる。それで此の業に從事したならば一生懸命に働いて社會の爲め　家の爲めに　つくさうといふ希望と決心である。若し此の業に從事することが出來なかつた時は、又その時　他の最も適した仕事を見つけて、其の業に　はげんで大いに世の爲めに　つくす覺悟である。

## 川崎すま子

此の大村小學とも後一年余りで　お別れすることになりました。もう後一年というのですから學校を出たら、なにになろうかといふ考へは誰でももつてゐることでせう。私も大きくなつたら東京にでて立派な職業婦人となりたいとも思ひます。その内でも第一希望としては、看護婦となり、御國の爲めに負傷した人達や、病氣で苦るしんでゐる人達を、骨身おしまずいたわつてやりたいと思ひます。

## 空家慶次（ソラヤケイジ）

僕は大きくなつたら海軍になりたいと思つてゐます。けれどそれが、しつぱいしたら店やになりたいと思ひます。そうして店を繁昌させて金でも出來たら、貧しい人達を助けてやるつもりで工夫へどほり海軍になれたらうれいのです。そして戰爭でもはじまつたら、身命をすてて國の爲につくし父母や兄弟をよろこばせたいと思ひます。

## 河野ミヨシ

私は今から考へてゐます、卒業したらお母さんの　お手傳ひをしてから、東京に行つて裁縫學校にはいて裁縫を一生懸命になつて、それから大村に歸つて來て、それが出來なかつたら大村に歸つて來て、お母さんの手傳ひをしてあげようと思ひます。

私は兵隊になりたいと思ってゐます。もしそれができたらどんなにうれしいかわかりません、もし兵隊になったら騎兵になって馬を自分の名馬として國の爲に働くつもりです。

浅沼誠一

此のなつかしい大村小學校も後一年余で卒業する時が來た。私は早一年から七年間も學校を卒業したら、内地に行き職業婦人となって、大村に歸る時はもう大きくなって、なつかしい父や兄弟にも會へるやうになるでせう。

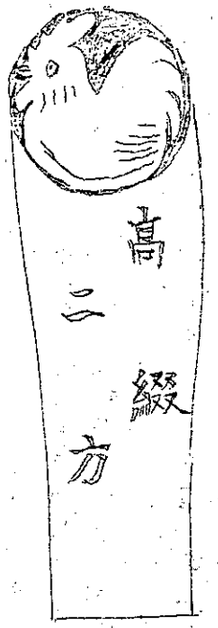
大友たつ子

自分の第一希望は大工であります。がまだ はっきりしたことはわからない。東京に兄がゐる。卒業したら ずぐに來いといってゐる。一度東京に來てみなければ……といってゐる。とにかく大工が自分の希望である。それがだめだったら滿洲に行き農業をやりたいとも思ってゐる。又、つしま半島あたりに行ってゴム園をやって見たいとも思ってゐる。

荒木秋子

第一職業婦人たりたい希望だ。はたしてそれが成しとげられるか心配である。日頃一生懸命に勉強し師範學校の考査に合格したらよいがと思ふ、それが出來なかったとしても、がっかりなどしない考へだ。我等の働くはたくさんある。成希望がだめだったら其の次の希望にかへる。私は常に運動が大すきだから体育學校に入學して卒業したら、運動の先生になりたいと思ふ。そして、オリンピック選手の一人になって戰ってみたいと思ふ。

小祝淑子




## 年末の所感

浅沼寛

いよ〳〵昭和九年も暮れ、明く北ば昭和十年になるのである。

愈近にはすゝはきの音が聞え、通りは大賣出しの旗がひらめき如何にも年の暮といふ感じがする。今年は色々な事があったので只ぼんやりとしてすごしたが來年はうんと奮發して春には立派に社会の一人とならう。

## 帰路

鵜飼愛子

黒いとばりに覆はれて星が二つ三つ光ってゐた。冴ゆる月 船頭の聲・くら暗の中から四五人出て來た、波にゆられながら眞中辺に來た頃どこからともなく「ようちやこりやー」も一つおまけに大きな胸をいだきながら……

不安な胸をいだきながら……

船は波止場に着いた。大勢の人夫が重さうな荷物を肩にかついで倉庫の中に入って行った。面白い活動を見終って我此先にと先生争って……路についた、オデコの鼻あたりまでは大勢の人が列をつくってにぎやかだったが一人二人とつくん〳〵少くなって肥料会社の所では六人になった、トンネル口の方から明るい光が見えて來た、工夫達である、皆手に手にランプを持っていた。ねずみが走る音までも聞える位しーんとしてゐた、唱歌を歌ながら元気を出して歩いたものも、二分とたゝぬうちにトンネルを通り過ぎて家が見えおした、家々ではまだランプが赤々とともってゐる、私達の帰りをまっているのでせう。皆に別れて家に帰ったのが十時近かった。

## 膽力の養成　佐々木晃朗

我々日本男子は特に膽力の養成をしなければならないと思ふ。どんな臆病者でも修養さへすれば臆病が直る、例へば不大将がそれであつた、大将は臆病でからだが弱く泣虫であつた、それが修養してあんな立派に出世をされたのである、だからどんなにからだが弱く臆病であつても修養さへすれば立派なからだともなり膽力の養成ともなります。

## 煙　大塚次雄

次のつゐた線香が一本、電灯の光に何げなく照らされてゐるのを見ていると、煙がゆらゆらと立ちのぼりかと思ふと風が障子の破れからふつてくる、立上つた煙はすぐにどこかへとんでゆく。

又むくむくと立上る煙は夏の雲の如くすぐゐ

き出す。と思つたら又障子の破れから風が吹いてきてどこかへはこばれる、今度は雨戸をしめたら静かにまゐ上つて行つた

## 一本の針　浅沼タリコ

夜は更けて九時半になつた、次第に夜半近くなつた、勉強を終つて床につゐた、寝返りをすると私の胸の辺で何かチクくするものがある、何かと少しびくくした、手を胸にあてるとどうでせう、あの恐ろしき一本の針、つとつてよくくと手をふつてくる、立上つた煙はすぐにどこかへ五分もあらうか、その長い針が今や胸をつきさびつくりして胸部から引出して見ると長さ一寸すやくと夢の國へと上つた。

## 事女綴方

年末所感　一年　菊池つゆみ

一年間といふ長い月日も何時しか過ぎようとして今五も名残が惜しまれるやうになりました。私は此の一年間をどうして過して来たのでせうか静かにふり返つて見ますと何かと楽しかつたこと悲しかつたこともありますがそれも亦この間のことのやうに思はれます。

此の島の事情にも此の一年間には随分変つたことがありましたが広い国ゆには色々のたきな出来事がありました。春の幽館の大火、四国九州の旱害北陸山陰地方の水害、最近では大阪地方の暴風害東北地方の冷害等お気毒のことがたくさんありました。まだ私達の耳にないこともたくさんあります。羽けて十年はこれらの地方の復旧やまた国際上にも重大な年です。私共は新年を迎へると共に一層心を引きしめて学業にはげみ益々修養に力めて立派な女性となつて此の非常時日本を背負つて立つ覚悟を以つていかなければならないと思ひます。

## 流れ星　一年　畠山久子

夕食後の片附もすんだので庭に出た。ケンタレー……と何処かの時計がにぶく七時を告げてねる。日長の夏ならばまだ宵であらうのにもう今は深夜だ。少しほてつて熱い頬を冷かな夜風が心持ちよくなでる。あーもうすうかり秋になつたかと思ひながら空を眺めると今上つたばかりであらう月が防風林の濱桐の梢の上にぽつかり浮んであたりは銀色に明るい空には一面銀砂でもふりまいたやうに星がいさくピカリピカリ淋しく光つてほんとうにいい月夜だ。遠くの家の灯かくも一層黒くはつきり見える。先程から何の音もしない静か

な夜である。私はひとり星の世界の唱歌をうたひました。

月なき空に煌く光り
あゝその星影希望の姿

歌ひ終って空を仰いでゐると細く青白い一條の線を引いて音もなく星が流れた。更け行く空は益くさへて行く

指輪の行方　二年　藤滝きみ

學校から歸ると母が「その机の引出を御覧、きたなくて」とおっしゃったのでいつかーようとおもうと思ってゐた引出の掃除をはじめました。すると思ひがけなく白い貝の指輪が出て来ました。それは叔父さんのお土産に何時か戴いたものでした。それがどうしてこんなところにはいってゐたのでせう。私はさっそくそれを母に見せました。あくる朝たーかに指にはめておいたその指輪がない　いくら考へても何處へおりたか思ひ出せない　ひとりでどうーしたらうと指輪のことばかりかんがへながら朝ご飯をおひにうつーてゐた。お昼の時にはくぴかりー光つてゐた指輪が色も変らずにゐるとは……もうさうでした昨夕お米を研ぐ時に指から抜けてゐたのを氣付かずに居たのです。でもよかった、なくなったと思ったのがあって、私はすいわいにつつんでこんどは分らないやうにーまった。

聞くも涙を覚えます　S

冷害に食ふことが出来ない東北地方から貰られて行った娘が十一月末日までに六萬人と聞いては涙なくにゐられません。一家の生命のために自分の身を犠牲にする娘達に比べて幸福を思ふばかりでなく又救ひ得ないにーてもその身を割いてこれらの娘達の命までお国につくすやうかめて労ひ度いと思ひます。

十二月四日　防火デーにて校庭に消防演習あり幼童の避難練習を行ひ、終って消防隊と共に大日本消防歌を高唱しつゝ村内を一巡す。

十二月二十二日　冬至です。一年中で最も晝が短く夜の長い日です。そして太陽は最も南より東から出て「南より西」に入るのです。

十二月二十四日　第二學期の終業式が行はれます、そして翌廿五日大正天皇祭から冬休みになります。

昭和九年拾二月第百五拾二號

大村尋常高等小學校なでしこ編輯部